

私が初めて浄瑠璃を聞いたのは、夫が延岡三ッ瀬教会牧師をしていた 50 年くらい前のことでした。クリスマスが祝われ、祝会の出し物(狂言)として、「傾城阿波の鳴門 巡礼歌の段」が演じられました。教会役員をしておられた 90 歳近い長老が太夫となって語り、彼の師匠である盲人の女性が三味線で伴奏されました。これはクリスマスとは全く関係のない出し物ですが、祝会を楽しく盛り上げるために、お得意の芸を披露してくださったのです。「**してして、かかさんの名は?**」/「**アーイー、お弓と申します**」と紋付に袴をつけて演台を前に座り、懸命に声を張り上げて語った長老の真剣な姿は忘れることが出来ません。大向こうから「待ってました！ おじいちゃん！」と夫は叫び、皆も大喜びしました。この長老は教会の大黒柱でした。また、師匠は泰然自若とした方で、友人の盲人を教会に紹介する伝道熱心な女性でした。懐かしい思い出です。

さて、私の妹は大の文楽(人形浄瑠璃)ファン！ 特に太夫の声音、太棹の三味線の音にしびれてしまうと言うのです。もちろん舞台では江戸時代の衣装をまとった人形たちが、三人の遣い手で動かされ、夢空間が醸し出されています。文化遺産に登録されている、素晴らしい伝統芸能の世界です。



先日、突然、妹の友人の文楽ファンが急用で観劇できなくなり、「代わりに見にお出で」と誘われました。喜んで駆けつけました。今回は「八代目竹本綱太夫五十回忌追善 六代目竹本織太夫襲名披露」の折となり、「摂州合邦辻」が襲名披露狂言でした。

賑やかな萬歳の掛け合い、雪から桜へと移る春を寿ぐような鷺娘の踊りの後に、「口上」が述べられました。文楽の世界の伝統、精進を目の当たりにできるよいチャンスでした。襲名した竹本織太夫を、大ファンの妹は「いい声よ！ オペラ歌手みたいよ～」と褒めます。お顔も立派で若々しいので、とても楽しみになりました。

狂言は時代物で、歴史に因む物語。主人公の玉手御前は艶めかしく、嫉妬に燃えて恋敵を跳梁跋扈。とはいえ、継母継子のお話、お家騒動、恋が絡んだ嘘の駆け引き、わが身を犠牲にする義理立て、そして結末はお定まりの悲劇です。

愛する継子が病に苦しみ、自分の血を飲ませれば、完治すると信じて、敢えて修羅場を作り、命を絶つ玉手御前。封建時代の世のしがらみにガンジガラメになりながらも、愛に命を捧げた玉手御前の功德を称え、非業の死から成仏を祈るという教訓もしっかり付け加えているのです。

三場目(後)に「床」の盆がクルリと回って、竹本織太夫が登場しました。文楽のセリフは大阪方言、昔の言葉、仏教用語などあり、難解なため、舞台の左右に字幕スーパーがあって、助かります。この場面は主人公の玉手御前、人倫に背くと義理立て、刀を手にした父親、嘆く母親、病気の愛する継子とその許嫁など、大勢が激しく動き回ります。嘘か真か？ 邪恋か親子の情愛か？ 血が流れることによって玉手御前の本心が吐露されてくるので、まさに修羅場。織太夫は熱演でした。情景描写から、怒り、疑い、嘆き、悲しみ、訴え、呪詛など、すべての登場人物の喜怒哀楽、心模様まで、一人で語ります。その渾身の迫力は並大抵のものではありませんでした。声に聞き入り、人形に見入りながら、舞台を堪能したのです。三味線も激しく、切なく、情感を盛り上げます。織太夫の語り口の凄さ、素晴らしさは心に訴える力がありました。妹とも目を合わせて「ネ！」と感嘆しました。

人形浄瑠璃は本当に贅沢な舞台です。継母、継子関係、殺傷、家督相続とテーマは生々しくても、人形の美しさ、可憐さにも魅了されて、その余韻に浸りながら、夫と私は家路につきました。